

20世紀中国における言語と教育

——人々の語りにみる新疆ウイグル自治区の民族教育

アナトラ・グリジャンナティ（古力加娜提・艾乃吐拉、中国・新疆師範大学）

河野明日香（名古屋大学）

キーワード：中国、新疆ウイグル自治区、
言語教育政策、民族教育

はじめに

多文化・多言語主義が強調される現在、「共生」という言葉が多様な領域で登場している。「共生」の理念は、人間の対自然関係だけではなく、人対人の関係、つまり言語・文化や歴史的背景を異にする民族と民族の関係、国民と外国人の関係などの社会的文化的文脈においても同様である。旧ソ連期、社会主義を国家イデオロギーに掲げたソビエト連邦と中国では、この「共生」概念のもと、様々な手段により国民統合が推進されてきた。とりわけ、即効性のあるツールとして重視されたのが民族語と国家語との「共生」を企図した言語教育政策であった。

ソ連では、レーニンなどの提唱した民族自決論のもと、エスニシティを基盤とした連邦国家建設が進められた。そこでは、各民族の持つ言語や伝統文化などが尊重されるとされ、そのイデオロギーをもとにした様々な政策が打ち出された。これは、文化や言語を異にする集団が存在する社会において、各々の集団が対等な立場で尊重されるべきであるという政策を押し進めているという意味では、カナダやオーストラリアなどで推進されている多文化主義とある一定の共通概念を有するといえるが、旧ソ連の場合、そもそもある一定の集団、特に民族とはいかなる人々なのか、といったことが曖昧なまま民族自決が目指された点が大きな特徴であり、

また大きな課題であったといえよう。そして、これはエスニシティやそれに連なる言語、文化を核とした構成共和国建設を進める上でも明確にはされてこなかったのである。

ソ連が存在した時代、中国では調和の取れた言語関係の構築を目指した「民族平等」の理念を核とした言語教育政策が進められた。しかし、現実には中央の言語と民族語の言語的調和関係の構築はなされず、憲法や教育法、民族区自治法における民族語の使用と言語選択の自由にとどまり、制度の理念と現実が乖離した状況が生じた。このような言語政策は中国という社会主義の大国における民族間の軋轢を生み、最終的には民族による教育機会や社会的地位の格差を拡大させた。旧ソ連期（1917年～1991年）に生み出されたこのような問題は、中国の中央ではなく少数民族の地域で顕在化し、それは今の子どもたちの学校選択や就労機会に大きな影響を与えている。

言語は自身を表現する手段であり、人は多くの社会的伝統や習慣的思考を言語を通じて身につけるため、言語を習得することは自然とその言語を基幹とする文化共同体への帰属意識をもたらすことになる⁽¹⁾。帰属意識あるいはアイデンティティを論じる場合、言語はそのひとつの要素に過ぎない。しかし、山崎が指摘しているように、「上からの視点に立つ『国家・国民』に比べ、下からの視点に拠る『民族』には、血統意識がより濃厚にある。そこに、民族としてのメンタリティ（心情的側面）が生じ、それを最も詳細に表す手段として言語が用いられる」といえる⁽²⁾。

(1) 山崎雅人「言語と民族のアイデンティティ」佐々木信彰編『現代中国の民族と経済』世界思想社、2001年、56ページ。

(2) 山崎雅人、前掲書、2001年、57ページ。

中国では、費孝通の「中華民族多元一体格局」論を根拠に、帰属意識あるいはアイデンティティの問題が論じられることが多い。費は、高いレベルのアイデンティティ（中華民族）は必ずしも低いレベルのアイデンティティ（民族）にとって代わったり、あるいはそれを排斥したりするのではなく、異なるレベルは衝突せず両立して存在することができるし、さらに、異なるレベルのアイデンティティの基礎の上にそれぞれがもともと持っていた特徴を發展させ、多言語・多文化の統一体を形成できると主張する。また、それによって高いレベルの民族は実質的には一体であり多元でもある複合体であり、その間には互いに対立する内部矛盾、すなわち差異の一致という矛盾が存在しているが、その消長や変化によって、絶え間なく変動する内外の条件に適応し、その共同体自身の存在と發展を可能にするのであると論じる。つまり、彼はどちらかというと言語や文化の多様性よりナショナルなアイデンティティの形成に重きをおいているのであるが、少数民族社会に身をおく人々にとって言語をめぐるさまざまな困難を内包する現実の費の言うほど固定的で、単純ではない。

本研究⁽³⁾では、このようなソ連が存在した20世紀の言語教育政策に着目し、当時、言語教育政策がどう策定・実施され、中国国民はそれをどう受容していたのか、さらに当時の言語教育政策は具体的に現在の言語教育政策にどのようなインパクトを与えているのかについて、新疆ウイグルをフィールドとし、明らかにする。また、このような問題意識に答えるため、具体的研究設問としては、以下の2点を設定した。

- ① 20世紀における社会主義大国のひとつである中国（特に、本稿では新疆ウイグル自治区を取り上げる）では、どのような言語教育政策が行われ、一般国民はそれをどのように受容していたのか
- ② 当時の言語教育政策は、現在の中国新疆

ウイグルの言語教育政策にどのようなインパクトを与えているのか、それは、現在の子どもの学力や言語・文化的価値観にどう影響しているのか

研究方法には、1) 中国における言語教育政策に関する法令、公文書、教育政策関連資料、当時使用されていた教科書等の文献分析、2) 1917年から1991年のソ連崩壊までの時期を経験した個人に対するインタビューによるライフヒストリー研究の2つを採用した。

本研究における研究方法の中核となるライフヒストリーについては、「本人の内面から見た現実の主体性把握を重視しつつ、研究者が近現代の社会史と照合し位置づけ、註記を添え」⁽⁴⁾構築したものがライフヒストリーであると述べられているように、旧ソ連期の中国新疆ウイグルの人々の語りと当時の言語教育政策関連の法令、公文書等を照らし合わせ分析することで、社会主義の大国であった中国の言語教育政策と人々の認識について新たな視座を提供することが可能となると考える。換言すると、個人の語りと言語を通じた国家政策をすり合わせて検討することで、言語を通じた当時の中国における個人と国家の結びつきの在りようが見えてくるといえるのである。

研究方法の詳細については後の章で詳しく述べるが、主に、個人の語りの収集の前段階として、現在の中国新疆ウイグルの主要都市における質問紙調査を行った。具体的には、2010年12月にウルムチ市の70名を対象に質問紙を配布し、そのうち65名分を回収した。回答者の言語能力や民族を考慮し、質問紙は漢語とウイグル語の2言語で作成した（脚注（17）参照）。

その後、質問紙調査の結果を踏まえ、計10名のインフォーマントを選出し、20世紀ソ連が存在した時期の言語教育政策についての聞き取り調査を行った。インタビューはインフォーマントの民族によってウイグル語または漢語のいずれ

(3) 本稿は、「20世紀社会主義大国における言語と教育：『共生』に連なる言語教育政策とその受容に関する国際比較研究」（第39回（平成22年度）三菱財団人文科学研究助成、代表者：河野明日香、共同研究者：アナトラ・グリジャンティ）の一環である。

(4) 中野卓「歴史的現実の再構成—個人史と社会史」中野・桜井編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂、1995年、191-218ページ。

かの言語で行った。ウイグル語、漢語の他、ロシア語学校で教育を受けた人はロシア語で当時の教育状況を語っていた。

インタビューでは調査の主軸となる複数の質問項目を予め決め、その枠内で自由にインフォーマントに話してもらう半構造化インタビューの手法を用いた。具体的項目には、「ソ連期、民族語学校や漢語学校など、どの言語で授業を行う学校で学んだか」などを挙げ、インフォーマントの言語観や政策に対する意見を浮き彫りにしていくことを目標とした。(河野、アナトラ)

1. 中国の言語政策とその実施プロセス

中国の言語政策は、1949年に制定された「中国政治協商会議共同綱領」(以下、綱領)およびこれを土台に制定された1954年の最初の憲法において定められたものである。綱領および憲法のいずれもが「各民族はすべて自己の言語文字を使用および発展させる自由を有する」と定めており、少数民族言語政策の遵守すべき基本的理念を明示している。少数民族の言語に対する保障は、公務、教育、訴訟など様々な領域にわたっている。教育に関しては、政務院による「第一次全国民族会議に関する報告書」(1951年)の中で、「少数民族教育における言語問題に関しては、現在通用文字を持っている民族の小学校と中学校(高校を含む)の各種教科は、必ず自民族の言語文字で教学しなければならない」と規定され、それは「大躍進運動」や「文化大革命」期を除き、今日まで継承されている。

また、中国の憲法では、「中華人民共和国は、全国の諸民族人民が共同で作り上げた統一した多民族国家である(序言)。中華人民共和国の諸民族は、一律に平等である。国家は、すべての少数民族の合法的な権利および利益を保障し、民族間の平等、団結および相互援助の関係を維持、発展させる。いずれの民族に対する差

別と抑圧も禁止し、民族の団結を破壊し、または民族の分裂を引き起こす行為は、これを禁止する(第4条)」とあるように、異なる言語や文化を有する諸民族の「平等」を保障している。

憲法におけるこのような保障は、1949年に中華人民共和国が成立してからこれまで4度の(憲法)改正を経ても、変わることなく現在に至っている。小川⁽⁵⁾も指摘するとおり、ここから導かれる社会主義的教育とは、「一律に平等」に扱われる諸民族が構成する「平等」社会の実現を追求していく教育、言い換えれば、「民族平等」社会実現のための教育のことである。それゆえ、各民族に教育を受ける権利を平等に与えるための民族教育を実施し、民族学校を設け、少数民族の児童・生徒が馴染みのある民族語(母語)による教育を受けることよっての民族平等が図られていた。しかしその一方で、多様な民族を抱えている中国政府は、国民統合の実現を促すため漢語教育の導入を計画的に行ない、小学校段階からの徹底した普及活動にも着手した。

中国の少数民族教育は建国当初から、国民統合を達成するための「国民教育」という性格と、民族性の覚醒と保持を内容とする「民族教育」という性格を同時に持っていた⁽⁶⁾という特徴が指摘されているように、国民統合を念頭においた漢語教育やその普及・拡大と、各民族の言語・文化の維持を両立させる教育が中国の民族教育の大きな特色であると考えられる。

民族教育の実施およびその発展プロセスは、主に、以下の5つの時期に分けて分析がなされている。第1期(1949-1956年)は民族教育の確立と発展の時期であり、第2期(1957-1965年)は少数民族地区の社会主義改造が一段落し、「地方民族主義」批判が始まった大躍進政策期であった。さらに、第3期(1966-1976年)は文化大革命の時期であり、第4期(1977-1992年)は民族教育の新発展の時期であった。そして、第5期(1993-現在)は初等教育の普

(5) 小川佳万『社会主義中国における少数民族教育-「民族平等」理念の展開-』東信堂、2001年。

(6) 中島勝住「中華人民共和国における少数民族教育問題」『多文化教育の比較研究教育における文化的同化と多様化-』(小林哲也他編)九州大学出版会、1985年、291ページ。

及問題が国家的な問題として認識されるに至った時期とされている⁽⁷⁾。本稿では、特に、民族教育の確立と発展の時期である第1期と、「地方民族主義」批判が展開され始めた第2期における言語政策の実施状況について、新疆ウイグル社会の民族教育を事例に検討していくこととする。(アナトラ)

2. 新疆ウイグル社会における 言語政策の実施状況

古くから独自の言語や固有の文字を持っているウイグル族の人々は、長い歴史の中で宗教を基盤とするマクタブ(初等教育)およびマドラサ(高等教育)での教育を実施していた。清朝統治時代では、政府は「義塾」を広く新疆に設置し、現地のウイグル族を集めて漢語を教授し、漢語・漢字教育を導入する政策を実施していた。官の命令書や徴税関係の券票にもアラビア文字によるウイグル語の旁注を付けた漢文が用いられていた。1880年時点では、新疆全体で37カ所に義塾が設置されていたが、1883年には19地区77カ所へと急激にその数は増加した。そのうちウイグル社会に置かれた義塾は11地区50カ所を越え、設置数全体の3分の2を占めるにいたった。

義塾では、『千字文』、『三字経』、『百家姓』、『四字韵語』、『雑字』といった漢語の初學者向けのテキストが使用され、さらに『孝経』や『小学』の通読も行われ、漢語の読み書き教育が推進されていた。また、孫壽昶によって漢語・ウイグル語対象語彙集とも言える『漢回合璧』も編纂されていた。これはウイグル語対訳漢字表記とウイグル語のアラビア文字表記を列挙したものであった⁽⁸⁾。

さらに、新疆では清朝の新政を担う人材を養成する近代的学校として「学堂」もつくられていた。しかし義塾と同じく、ムスリムの学生たちに対してはコーランに代えて儒学書が、アラ

ビア語・アラビア文字の代替として漢語・漢字が、アッラーの代わりに孔子崇拝が要求された。ウイグル族の人々の中には、入学を勧められると隠れてこれを拒否した者もあり、富裕者の中には自分の子どもの代わりに貧民の子弟を雇って身代り入学させる者までいた⁽⁹⁾。

1903年、清朝は本格的に近代教育の普及の方針に乗り出した。新疆における教育の普及は人口の大半を占めるイスラム教徒の就学に関わっているため、それに適した一連の方針が立てられた。前出の片岡によると、その近代教育の普及方針では「ウイグル族の教化についてその礼俗を変え、宗教を改めることが今日の急務ではないとし、ウイグル語を重視し、師範学堂・法制学堂・中学堂の生徒に学習せしめる。かつて義塾でみられた、教師が生徒に暴行を加えるようなことを厳禁する。もし違反した場合は、厳罰に処する。学生には、徭役の義務を免除する。纏師範学堂を設け、ウイグル族指導者を養成する」⁽¹⁰⁾と定められていた。

しかし、1908年から再び初等小学堂に代わって漢語の普及教育機関の中心としての漢語学堂が設置された。政府は教育普及の行き詰まりをウイグル族の「言語不通」のためとし、その打開策として漢語・漢字の教育を導入したのである。一連のこの流れについて片岡は、当初の基本方針はウイグル語教育の完全な放棄・転換であったが、ウイグル=イスラム社会の否定につながる漢語教育は、民衆の抵抗の下、見せかけの従順として終わったようであると指摘している⁽¹¹⁾。

一方、成崇徳はこれらの動向を以下の3つの原因にまとめている。

- ① 学校の多くは政府が創り、経費を調達するのが困難であった
- ② 教員の資質が低く、能力がその任に堪えない者が多い
- ③ 教育は漢語・漢字の普及を中心に行われ、

(7) 小川佳万、前掲書、2001年、10-11ページ。

(8) 片岡一忠『清朝新疆統治研究』雄山閣、1991年、203ページ。

(9) 片岡一忠、前掲書、1991年、202-205ページ。

(10) 片岡一忠、前掲書、1991年、310ページ。

(11) 片岡一忠、前掲書、1991年、327ページ。

新疆ウイグル地域の民族的特徴には合わなかった⁽¹²⁾

そしてこれらの結果として、漢語・漢字教育は人々の抵抗を受けたと指摘した。

20世紀のはじめになると、ウイグル族の人々の間では、自民族言語による近代教育の必要性が認識され、その重要性が叫ばれるようになってきた。清水によれば、ウイグル文化の中心的地域であった1930年代のカシュガルでは、ウイグル族自身の手による学校教育の普及が促進されていたという⁽¹³⁾。当時は、新疆テュルク系住民の中で、トルコやロシアから教師を招聘し、帰還留学生を教師に迎えるといった「新方式」⁽¹⁴⁾の学校教育を推進する動きが現れた。そこではトルコで学んだ教師たちがイスタンブールの学校プログラムを用いて教育を行い、ロシア語や漢語も教えていた。Borhanによると、この新方式教育では「共通トルコ語」による教科書を用いて、読み書き、イスラムの知識、数学、理科、歴史、地理、ロシア語などが教えられていたという⁽¹⁵⁾。

中華人民共和国の成立以降、新疆ウイグル社会では、ウイグル人自身の手による学校教育から「民族教育」への転換が行われるようになった。1950年に人民政府が「新疆の教育改革に関する指示（関与目前新疆教育改革の指示）」を出し、漢族中学校では選択科目としてロシア語かウイグル語を設け、民族中学校では選択科目として漢語かロシア語を設けることが提起された。また、1954年の教育庁による民族政策の実施に関する報告でも、漢族学生はウイグル

語を、少数民族学生は漢語をマスターすることの重要性が同時に強調されていた⁽¹⁶⁾。そして、1956年の「第二屆中等教育會議」において、初めて少数民族中学生を対象とする漢語教育の導入とその具体的な計画が出され、漢語教育が中学校段階からスタートすることになったのである。

具体的には、中学校で週に4～6時間程度の漢語教育を実施し、生徒らに2500程度の漢字を学習させ、簡単な会話や通俗的な読み物が読めるようにするという教育の目標が立てられていた。高校の段階では、さらに2000字を学習させ、基本的な科学術語や漢語の固有名詞を身につけさせ、漢語で一般的な物語の記述ができるようにすることが目指された。また、高校卒業で4500の漢字を覚えさせ、大学進学後は漢語で受講でき、漢字の教科書が使用できるように計画的な漢語教育を実施することも定められていた。

このように、ウイグル語話者が総人口の約8割を占める（表1参照）新疆ウイグル社会において、1950年代の半ばから漢語教育が導入され、民族教育で一定の割合を占めるようになったのである。では、その民族教育の実態はどのようなものであったのだろうか。次章では、当時民族教育を受けた人々の語りを紹介しながら、当時の言語政策や民族教育の在り方と、人々はそれをどのように受容していたのかについて実証的に見ていきたい。（アナトラ）

(12) 成崇徳『清代西部開発』山西古籍出版社、2002年。

(13) 清水由里子「ウイグル人の女子学校教育の開始とその展開—1930年代のカシュガルを事例に—」平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究A（1））研究成果報告書『中央アジアにおけるウイグル人地域社会の変容と民族アイデンティティに関する調査研究』研究代表者：新永康、2007年。

(14) これについて岡本は、新方式の学校教育の開始時期に関し、『『新疆教育年鑑』（1991年）で、新疆の近代学校は1907年、新疆提学史の杜彤が各道の義塾を両等小学堂に改めるよう命じ、各種の実業学堂や漢語学堂、識字学塾、法政学堂、中俄学堂、初級師範学堂を建てた時に始まると記す。だがそれは、新疆省の漢人や満州人などの近代教育の始まりであって、トルコ系ムスリムによる主体的な民族教育の始まりとはいえない』と指摘している。岡本雅享『中国の少数民族教育と言語政策』（増補改訂版）社会評論社、2008年。

(15) Borhan（包爾漢）『新疆50年』文史資料出版社、1984年。

(16) 歐陽志『新疆解放以来有关漢語和双語教学的文件及政策規定總述』新疆維吾尔自治区教育科学研究所・新疆維吾尔自治区教学研究室編、劉軍主編『新疆中小學校漢語『双語』教学研究』新疆教育出版社、2008年、3ページ。

表1 新疆における民族人口の変化（単位：人）

	1949年	1953年	1964年	1982年	1990年	2000年	2008年
全区（総数）	4,333,400 (100%)	4,873,608 (100%)	7,270,067 (100%)	13,081,633 (100%)	15,155,778 (100%)	17,915,459 (99.4%)	20,951,900 (100%)
ウイグル	3,291,145 (76%)	3,607,609 (74%)	3,991,577 (54.9%)	5,949,655 (45.5%)	7,194,675 (47.5%)	8,256,661 (46.1%)	9,650,629 (46.0%)
漢	291,021 (6.7%)	332,126 (6.8%)	2,321,216 (31.9%)	5,286,532 (40.4%)	5,695,626 (37.6%)	7,023,910 (39.2%)	8,239,245 (39.3%)
カザフ	443,655 (10.2%)	506,390 (10.4%)	489,126 (6.7%)	903,335 (6.9%)	1,106,998 (7.3%)	1,277,474 (7.1%)	1,483,883 (7.0%)
回	122,501 (2.8%)	134,215 (2.8%)	264,017 (3.6%)	570,789 (4.5%)	681,527 (4.5%)	813,023 (4.5%)	942,956 (4.5%)
ウズベク	12,174 (0.3%)	13,580 (0.3%)	7,683 (0.1%)	12,433 (0.1%)	14,456 (0.1%)	13,198 (0.07%)	16,138 (0.08%)
キルギス	66,145 (1.5%)	70,928 (1.5%)	69,576 (1.0%)	112,973 (0.9%)	139,781 (0.9%)	159,584 (0.9%)	181,862 (0.87%)
モンゴル	52,453 (1.2%)	58,346 (1.2%)	70,743 (1.0%)	117,460 (0.9%)	137,740 (0.9%)	156,892 (0.9%)	177,120 (0.85%)
シボ	11,668 (0.3%)	12,738 (0.3%)	17,125 (0.2%)	27,364 (0.2%)	33,082 (0.2%)	39,238 (0.2%)	42,444 (0.20%)
オロス	19,452 (0.5%)	22,166 (0.5%)	1,191 (0.02%)	2,662 (0.02%)	8,082 (0.05%)	10,598 (0.06%)	11,609 (0.06%)
タジク	13,486 (0.3%)	14,460 (0.3%)	16,231 (0.2%)	26,482 (0.2%)	33,512 (0.2%)	39,642 (0.2%)	44,824 (0.21%)
ダウール	1,805 (0.04%)	1,968 (0.04%)	2,720 (0.04%)	4,370 (0.03%)	5,398 (0.04%)	6,405 (0.04%)	6,678 (0.03%)
タタール	5,926 (0.1%)	6,892 (0.1%)	2,281 (0.03%)	4,106 (0.03%)	4,821 (0.03%)	4,695 (0.03%)	4,728 (0.02%)
満	1,039 (0.02%)	1,163 (0.02%)	2,909 (0.04%)	9,137 (0.07%)	18,403 (0.1%)	22,329 (0.1%)	25,626 (0.12%)

出所：若林敬子 1996『現代中国の人口問題と社会変動』、『中国 1990 年人口普查資料第一冊』、『新疆統計年鑑』2001、2008 年版より筆者作成。

3. 調査地と調査の概要

3-1. 調査地の概要

新疆はユーラシア大陸の中央に位置し、中国の西北に位置する。面積は160万平方キロであり、中国の最大の省区である。新疆の東と南は甘肅省、青海省、チベット自治区と隣り合っている。北東から南西までモンゴル、ロシア、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、アフガニスタン、パキスタン、インドなどの国々と接しており、国境線の長さは5000キロに及ぶ。全国の国境線の総延長の四分の一を占め、国境線が中国で一番長い省区となっている。新疆は中国の歴史では西域と呼ばれ、古代のシルクロードが必ず経由する地域でもある。それと同時に、この地域では世界四大文明のエジプト文明、メソポタミア文明、インダス文明、黄河文明が出会い、世界三大語族であるシナ・チベット語族、アルタイ語族、インド・ヨーロッパ語族もここで交流してきた。世界三大宗教の仏教、イスラム教、キリスト教もこの地に共存し

ている。

新疆には古くからウイグル族、漢族、回族、カザフ族、キルギス族、ウズベク族、モンゴル族、ダフル族、シボ族、タジク族、タタール族、オロス族、満族など十数の民族が居住しており、民族、言語、宗教はかなり複雑である。それらの民族のうち、漢族、回族、満族が漢語を母語としており、他の民族は独自の民族言語



図1 新疆ウイグル自治区地図

(出所：http://www.big.com, 2009年10月1日アクセス)

と固有の伝統文字を持っている。このように、漢語以外の言語を第一言語とする民族集団を多数抱えていることが当地域の大きな特徴である。ウイグル語、カザフ語、モンゴル語、キルギス語は新疆人民代表大会正式の「工作言語」となっており、自治区レベルの放送局では五つの言語で、テレビ番組はウイグル語、漢語、カザフ語で放送され、図書・雑誌類はシボ語を含めて6つの言語・文字で発行されている。

中華人民共和国成立の時点（1949年）では、新疆の総人口（4,333,400人）の76%がウイグル族であり、漢族は6.7%しかいなかった。当時、日常生活をはじめ、学校教育や公共的な場までウイグル語が公用語として使用されていた。ところが、改革開放政策や市場の経済化に伴い、漢族が大量に新疆へ移住し、人口構成に大きな変化をもたらした。1990年の統計によると、漢族は新疆の総人口（15,155,778人）の37.6%（5,695,626人）まで増加し、これに対してウイグル族の割合は47.5%（7,194,675人）まで減少している。2008年の『新疆統計年鑑』によると、現在新疆の総人口は約2,100万人まで増加しており、そのうちウイグル族は960万人余りで、総人口の46%を占めている。漢族は820万人余りで総人口の約40%にまで増加している。

このように、漢族人口の増加が漢語の使用や漢語教育への偏重を招いた一因であると考えられるが、この背景には中国政府の推進する漢語を重点化した言語教育政策があることも看過できない。政府は、公務員や重点企業などの重要ポストに漢族を充て、漢族人口を増やすとともに、漢語抜きにはいい大学に進学することやいい仕事に就くことがかなわないような社会構造を次第につくり始めているといえる。このような意見は、アンケートやインタビュー上でも多々聞かれた点であり、新疆における漢語への偏重は漢族人口の急激な増加と政府の言語教育政策あるいは言語政策が相まって生み出された産物だと考えられるのである。（アナトラ）

3-2. 調査の概要と研究方法

本稿で用いるデータ資料は、2010年12月16日から30日までの間、中国・新疆ウイグル自治区

のウルムチ市で実施した調査で得られたものである。調査方法としては、フィールド・ワークを主とし、資料収集、アンケート調査、インタビュー調査を行った。アンケートについては質問表⁽¹⁷⁾を作成し、50～70代後半の人々を対象に70部を配布し、そのうち65部が回収された。アンケートは、本研究に係るソ連が存在した時代に教育を受けた人々が言語教育政策をどのように受容しているのかについて大まかに把握するためと、調査の第2段階としてのインタビュー調査対象者を絞り込む目的で実施した。インタビュー対象者は、アンケートの全24項目すべてに回答し、かつ最後の24項目目の「現在の教育をどのように思いますか」という質問に、自身の意見や考えを詳述してくれた回答者で自身の連絡先を明記してくれた人を中心に選出した。実際には、新疆ウイグル自治区における民族教育や言語政策はセンシティブな内容であるため、24項目の質問に対して詳細を記述する回答者は少なかった。

結果として、計10名（ウイグル族8名、漢族2名）にインタビュー調査を行った。これらのアンケート調査とインタビュー調査の結果をもとに、本研究ではライフヒストリー・アプローチによる分析手法を採用することとした。

ライフヒストリーについては、本稿冒頭で触れた、「本人の内面から見た現実の主体性把握を重視しつつ、研究者が近現代の社会史と照合し位置づけ、註記を添え」⁽¹⁸⁾ 構築したものがライフヒストリーであるとするものや、「ある個人が時間的経過を踏まえ、自らの経験や社会に関して解釈した記録」⁽¹⁹⁾ など、さまざまな視点からその定義付けがなされている。特に、前出の川又はライフヒストリーとライフストーリーの異同について詳細な検討を行っており、そこでは「ライフヒストリーという語を用いる研究者の多くが『個人の歴史』の歴史的側面・社会的側面に注目している点」⁽²⁰⁾ が重視されている。また、川又は研究者のスタンスについて、「個人の語り（あるいは語りで示された経験）を、研究者側が自らの研究に引きつけつつ、歴史的・社会的文脈に置くことにより、ライフヒストリー研究が成り立つ」⁽²¹⁾ という点も指

摘している。

本研究で、ライフストーリーではなくライフヒストリーという語を採用した理由も、基本的には川又が主張する人々の語りを核に、その当時の言語や言語教育政策の歴史的・社会的側面や関連する政策が孕む諸課題を明らかにするこ

とを試みたからである。

具体的には、旧ソ連期の中国新疆ウイグル自治区の人々の語りと当時の言語教育政策関連の法令、公文書等を照らし合わせ分析することで、社会主義の大国のひとつであった中国の言語教育政策とそれに対する人々の認識や受容の

(17) アンケート用質問項目一覧 (少数民族対象)

氏名	年齢	歳	性別	男	女	学歴
職業	民族	ウイグル、漢、カザフ、キルギス、モンゴル、その他()族				
1	あなたは学校教育を受けた経験がありますか。ある場合、民族学校に通っていましたか。それとも漢族学校に通っていましたか。①受けた経験がある ②受けた経験はない ③民族学校 ④漢族学校					
2	民族学校に通っていた場合、漢語教育を受けた経験はありますか。①ある ②ない ③覚えていない					
3	何年生から漢語教育を受けましたか。①小学校4年生 ②小学校5年生 ③中学校 ④その他()					
4	担当の先生は漢族ですか。それとも少数民族ですか。①漢族 ②少数民族					
5	漢族の先生の少数民族言語のレベルはどのくらいでしたか(主にウイグル語のレベルを指す)。 ①非常に良い ②良い ③悪くはない ④あまり良くない ⑤良くない ⑥聞き取りは大丈夫だが、会話はできない ⑦読めるが、書けない					
6	少数民族の先生の漢語レベルはどのくらいでしたか。 ①非常に良い(漢語に精通していた) ②中級レベル ③初級レベル					
7	当時、漢語は必修科目でしたか。それとも選択科目でしたか。漢語の他に、語学関係の科目はありましたか。 ①必修科目 ②選択科目 ③漢語だけ ④漢語の他ロシア語もあった					
8	1) 同級生に他の少数民族の人はいましたか。2) どの民族が多かったですか。 1) ①いる ②いない ③ほとんどいない 2) 比較的多い民族は()族					
9	当時、漢語ができないと不自由を感じることはありましたか。(例えば、買い物、病院、役所など) ①不自由を感じることは全くなかった ②ほとんどなかった ③多少あった ④あった ⑤色々の不自由を感じる事が多かった					
10	子どもをどの学校に入学させたいと考えていましたか。①民族学校 ②漢族学校					
11	学校を選ぶときの基準は何でしたか。 ①子どもの将来を考えて ②自民族の学校であるから ③子どもが選んだ ④家の近くに民族学校 しかなかったため(あるいは漢族学校しかなかったため) ⑤特にない ⑥その他()					
12	現在、漢語の読み書きはできますか。 ①できる ②少しできる ③簡単なものであればできる ④できない ⑤全然できない ⑥聞き取りは大丈夫だが、会話はできない ⑦読めるが書けない					
13	現在、日常生活でよく使う言語は何ですか。①漢語 ②ウイグル語 ③その他()語					
14	新聞、テレビなどのメディアに触れる際に、よく使う言語は何ですか(新聞、テレビ、ラジオ、インターネットなど)。 ①漢語 ②ウイグル語 ③その他()語					
15	(民考漢を対象として) 当時、なぜ漢族学校を選択しましたか。 ①家の近くに民族学校がなかったため ②良い大学に進学できると思って ③より良い社会的地位を得られるとあって ④特に理由はない					
16	あなたの第二言語は何語ですか。①ウイグル語 ②ロシア語 ③英語 ④その他()語					
17	それは必修科目ですか、それとも選択科目ですか。①必修科目 ②選択科目					
18	母語の読み書きはできますか。 ①できる ②少しできる ③簡単なものはできる ④あまりできない ⑤できない ⑥聞き取りは大丈夫だが、会話はあまりできない ⑦読めるが書けない					
19	同級生に少数民族が何人いましたか。①一人 ②二人 ③三人 ④いない ⑤その他()人					
20	配偶者は「民考漢」ですか、それとも「民考民」ですか。①「民考漢」 ②「民考民」					
21	「民考漢」と「民考民」の文化的差異をどのように乗り越えましたか。それは簡単に乗り越える差異でしょうか。 ①何の差異も感じていない ②乗り越えるのは難しい文化的差異もあった ③文化的差異は簡単に乗り越えられるものではない ④すぐに乗り越えた ⑤乗り越えられない差異もあった ⑥文化的差異をどのように乗り越えましたか、具体的に記述してください。()					
22	子どもをどの学校に入学させましたか。①民族学校 ②漢族学校					
23	なぜその学校を選んだのですか。 ①子どもの将来を考えて ②自民族の学校であるから ③子どもが選んだ ④家の近くに民族学校(漢族学校)しかなかったため ⑤特にない ⑥その他()					
24	現在の教育をどのように思いますか。 ①建国時期に比べて発展が著しい(1949-1978) ②改革開放以来、発展が著しい(1978-1990) ③市場経済化以降、発展が著しい(1990-2000) ④その他()					

(18) 中野卓、前掲書、1995年、191-218ページ。

(19) 川又俊則『ライフヒストリー研究の基礎 個人の「語り」にもみる現代日本のキリスト教』創風社、2002年、16ページ。

(20) 川又俊則、前掲書、2002年、20ページ。

(21) 川又俊則、前掲書、2002年、20ページ。

表2 質問紙調査対象者内訳（筆者作成）

年齢別	ウイグル族	男性	女性	漢族	男性	女性	モンゴル族	総人数
30～39代	1人		1人					1人
40～49代	4人	3人	1人					4人
50～59代	25人	13人	12人	9人	4人	5人		34人
60～69代	13人	8人	5人	2人	2人			15人
70～79代	6人	5人	1人	4人	4人		1人（男）	11人
								65人

様子について、新たな視座を提供することが可能となると考える。換言すれば、個人の語りと言語を通じた国家政策をすり合わせて検討することで、言語を通じた当時の中国における個人と国家の結びつきの在りようが見えてくるといえるのである。（河野）

4. 人々の語りから見る 1950 年代の民族教育

本研究では、アンケート調査の結果に基づき、10名のインタビュー対象者を選定した。10名の内訳は、ウイグル族が8名、漢族が2名で、ウイグル族8名のうち5名は多言語話者で、残る3名はウイグル語と漢語のバイリンガルであった。インタビューを行った10名全員が「言葉は必要に迫られて覚えるものである」という考え方を明確に持っていた。

本章では、10名のインタビュー調査の結果のなかでも、当時学校教育を受けていた人々で民族教育や当時の少数民族言語政策について自分なりの考えや現在の教育に対する意見を語ってくれた人、当時の民族関係について自身の経験などを交えながら詳しく語ってくれた回答者について、特に4名の事例を挙げながら検討を行う。

(1) 漢語ができなくても、不自由なく 日常生活を送れる社会

A氏:男性、ウイグル族、北新疆のドルブジン出身、73歳(2010年調査当時)。6言語で通訳が可能。

A氏は、カザフ族が多く居住している地域（チョチュク地区、ドルブジン市）で生まれた。母語はウイグル語で、その他ロシア語、ウズベ

ク語、漢語、タタール語、カザフ語など6つの言葉が話せる多言語話者である。特に、カザフ語が万能であり、初の翻訳作品は中国近代文学の有名な作品を漢語からカザフ語に訳したものであった。その他、現在まで世界で知られている名作（詩を含む）を漢語からウイグル語やカザフ語に訳しており、その字数は1千万以上に達している。

A氏は、1945年に小学校に入学し、ウイグル語で教育を受けた。A氏の語りによると、当時の教材は旧ソ連から輸入したものが多く、教員にはウイグル族が多かったが、なかにはウズベク人やロシア人もいたという。この時期の学校教育はすべて民族語で行われており、小学校1年からロシア語が必修科目に入っていた。中学校からは漢語が必須科目として設けられていたが、高校を卒業するまで漢語の学習を続けても会話すらできずに終わったという。当時のウイグル社会では、漢語ができなくても困ることなく日常生活を送ることができ、逆に漢族はウイグル語ができないと困るというような社会的言語環境であった。少数民族の人はほとんど漢語ができず、逆に漢族のなかには日常的なウイグル語ができる人が多かった。

A氏は1955年に高校を卒業し、中央民族学院（現在の中央民族大学）へ進学することになるが、その時は「Ni, Wo, Ta」（私、あなた、彼／彼女）すら使用することができなかったという。クラスメートと北京行きの汽車に乗った時も、仲間に漢語ができる人は一人もおらず、困ったことを今でも覚えているという。インタビュー時、A氏は汽車で出会った同じチョチュク出身の漢族の人が汽車内での通訳や案内と、中央民族学院まで送ってくれたことを思い出した

がら、当時のウイグル族と漢族の民族間関係についても語っていた。

このように、1950年代では、民族教育において漢語が一つの必修科目として導入されていても日常生活で使用される頻度は少なく、実際はその教育的効果はほとんどなかったことが窺える。また、当時の言語政策では、実に少数民族言語や民族教育が重視されており、(少数民族の人々が)漢語ができないことで社会的に不利な立場に置かれたり、不便を感じるなどはあまりなかったといえる。これは、漢族の人々がウイグル語の言語能力なしでは日常生活に支障が生じるため、日常生活に必要なウイグル語ができたというA氏の語りに顕著であるが、当時の新疆ウイグル自治区の地方ではウイグル語の使用率の方が漢語の使用率よりも高かったということを推測させるものである。

(2) 国際関係と新疆の民族教育が 言語に及ぼした影響

B氏：女性、ウイグル族、北新疆のチョチュク出身、71歳（2010年調査当時）。

B氏は、1946年に小学校(Mahmud・Kashgari Mektibi)に入学し、ウイグル語で教育を受け、1956年に高校を卒業している。A氏の語りにもあったように、当時の学校教育制度は4・3・3制であり、中学校から漢語教育が始まっている。B氏の学校では、ウイグル語ができる漢族の先生が漢語を教えていたことは覚えているが、どのように教えていたか、また、生徒たちは漢語をどのように勉強していたかについては覚えていないという。それは当時、日常生活においては漢語を使うチャンスもなく、使う必要もなかったためであるとB氏は語る。

1950年代初頭は中国と旧ソ連間の交流が盛んに行われた時期であり、1955年から成績がよく、家庭の経済状況が厳しい学生50人を国費でソ連に留学させる政策が打ち出された。その50人は、タシケント（現在のウズベキスタンの首都）やアルマアタ（現在のカザフスタンの旧首都）など、それぞれ異なる地域に派遣されていた。B氏はタシケント（当時のタシケント中央

アジア大学）に派遣され、そこで5年間勉強していた。

1年目は、ほとんどの授業がウズベク語で行われていることから、授業についていくのに困ったこともあった。語学の授業にはウズベク語やロシア語などもあったので、大学で学ぶために、また日常生活を送るために必要な言語力を習得することができ、2年目からはだんだんと留学生活にも慣れていった。タシケントの大学を卒業後、新疆に戻り、現在の新疆大学で教職に就いた。もちろん、留学に行った人が全員戻ってきたわけではなく、それぞれの留学地に残った人もいる。そもそも当時の新疆における漢族人口は少なかったということもあり、漢族は派遣留学生の対象にはなっておらず、ウイグル族やカザフ族の学生の派遣が多かったという。

この留学制度は4年間（1955年、1956年、1957年、1959年、当時の制度上の問題で、1958年は中止）しか実施されなかったが、留学し、様々な知識や語学力を身につけ、知識人となり新疆に戻ってきた学生たちは新疆の民族教育を支えていたとB氏は語る。40年余り教育に携わってきたB氏は、時代の変化とともに変わりつつある教育、とりわけ民族教育のあり方について、以下のように述べている。

私は、教職に就いて退職するまで、40年余りウイグル語を用いて授業を行ってきた。漢語は独学で勉強した。読む力や聞く力は十分あるが、書く力はない。私たちの時代ではロシア語ができる教員が多かったので、文献などはロシア語のものをよく使っていた。漢族の教員の中にもウイグル語やカザフ語ができる者が多く、仕事上でも日常生活においても漢語ができなくて困った覚えはない。それは当時、ウイグル語の社会的経済的使用価値が高かったこともあるだろうが、一方で、少数民族言語が言語政策によって保障されていたことも関係しているだろう。

換言すれば、B氏は、少数民族言語政策は変わっていないものの、現在の民族教育現場で起

こっている変化については理解しがたい側面があると語っているのである。

当時は、中国政府と旧ソ連の友好関係や新疆の地理的な位置づけなどにより、新疆、特にイリ、ウルムチ、チョチュク地方にロシア人が多く滞在していた。当時の新疆工学院（2001年に新疆大学と合併）や新疆医学院（現在の新疆医学大学）では、多くのロシア人が教員として働いていた。

B氏の語りにあったような留学制度が存在したほか、現地でのロシア語学校も数多く設置されていた。それらの学校のほとんどが、旧ソ連の国境線に最も近いイリ市と新疆の経済、文化、政治の中心地であるウルムチ市に設けられた。イリのロシア語学校は旧ソ連政府によって創設され、またウルムチでは中国政府により創設されていた。そこで働く教員のほとんどはロシア人であった。後述のC氏の語りからもわかるように、ロシア語学校は民族学校に比べソフト・ハードの両面で優れており、公務員や経済的余裕のある家庭の子どもが通うことが多かった。しかし、1961年にロシア語学校はすべて閉鎖され、ほとんどの児童・生徒は民族学校に転校していった。この背景には、それまでの中ソ両国の蜜月関係の崩壊とそれに伴う中ソ対立という、国際関係の大きな潮流が存在したのである。

(3) ロシア語学校と民族語学校の格差

C氏：男性、ウイグル族、北新疆のイリ出身、65歳（2010年調査当時）。

公務員の家庭に生まれたC氏は家庭環境に恵まれ、1954年から1961年まで、ウルムチのロシア語学校に通っていた。教員は全員ロシア人で、すべての授業はロシア語で受けていた。家庭では母語であるウイグル語を使用するため、母語の聞き取りと会話はできていたが、読み書きはできなかったという。C氏によれば、一部の民族学校を除けば、学校の整備や教員の質などは、民族語学校とロシア語学校は比べものにならなかったという。

それほどロシア語学校の教育環境のレベルは

ハード面でもソフト面でも民族学校と比べ高かったわけであるが、教育カリキュラムは旧ソ連構成共和国のなかでもロシアのものを参考にし、教材などもロシアから輸入したものが多かった。しかし、当時はまだマクタブやマドラサなどの宗教学校に通うウイグル人が多かったため、教員の中には近代教育を受けた者が少なく、そのため公務員などエリート層の人々は民族学校の教育の質を疑い、子どもをロシア語学校に入学させたがった。

C氏も最初はイリのロシア語学校に入学し、両親の転勤によりウルムチ市のロシア語学校に転校した。しかし、1961年に中学校を卒業し、高校に入学する直前に、当時の政治的な問題によりすべてのロシア語学校が閉鎖された。既述の中ソ関係の悪化がその大きな理由であるが、その後、ウイグル語の読み書きを勉強した経験のないC氏はウイグル族の高校に転校できず、中学校の2年次に編入し、勉強をやり直したそうである。当時のクラスメートの一部はソ連に行ってしまったが、今でも頻繁にやり取りしているカザフ人や回族の友人がいる。その他、タタール族、ウイグル族の女性も同じクラスに何人かいたという。高校を卒業した頃、文化大革命が始まったため、大学への進学はかなわなかったが、生涯教育のコースで勉強を続けた、とB氏は語っていた。

文化大革命の終わり頃には、新疆科学学院が外国語のできる通訳者を募集していた。C氏はロシア語の通訳・翻訳の試験を受け合格し、そこで翻訳や少数民族の歴史研究等の仕事に就いた。それ以降、退職するまで新疆科学学院において、ロシア語で書かれた文学作品をウイグル語に訳したり、研究のために語学の勉強をする外国人対象にウイグル語教育を行うなどの仕事に従事してきたそうである。C氏も、高校卒業まではまともな漢語教育を受けた経験がなく、独学で勉強した。これまで仕事上では漢語の参考文献などを読んで理解できるし、会話でも困ることはなかったという。

このように、1950年代に学校教育を受けたウイグル族の人々は、中国政府の少数民族言語政策によって自民族言語で教育を受けた人が多

く、中学校段階から漢語教育を受けたが、その教育的効果はほとんどなかったことが理解できる。それは、当時の社会的言語環境においてはウイグル語の使用率が高く、また公用語としての機能が十分果たされており、漢語の社会的実用性がまだ現在ほど高くなかったからであると考えられる。

ウイグル社会において、漢語ができなくても日常生活上あるいは仕事上は不自由を感じるものがなかった時代と対照的に、現在は漢語ができないと日常生活を始め、入学・進学、就職ができない時代になりつつある。政府が推進する少数民族言語政策の基盤自体は変わっていないものの、漢語ができなければ大学進学や就職の機会等に大きな格差が生じるという現実が、政策の枠組みを遥かに超え始めている。

(4) 言葉は必要に迫られ覚えるもの

D氏：男性、漢族、山東出身（16歳のときに、新疆に移住）、61歳（2010年調査当時）。

農民の家庭出身のD氏は、高校卒業後、1968年に仕事の関係で南新疆のアクス市に移住してきた。そこで仕事の合間に現地のウイグル人にウイグル語を教えてもらい、薬剤師の資格を取るため専門学校にも通っていた。当時は、アクス市ではまだ漢族は非常に少なく、ウイグル族の人々は漢語がほとんどできなかった。

D氏の大家の娘は漢語が少し話せたため、彼女に助けてもらいながらウイグル族の人々と交流をしていたという。そのうち、D氏はウイグル語ができるようになり、仕事の効率も変わったという。薬屋の責任者になったD氏は、「漢語ができない人々に薬の使い方をウイグル語で説明してあげると、みんな安心して買える。言葉が通じることで互いに信頼関係ができ、それが売り上げに直接関わってくる」と述べる。つまり、自分がウイグル語を勉強したのはこの地域で生活し、生きていくためでもあるが、その民族自体に対する尊敬であると語るのである。

D氏は1998年にウルムチに移住したため、ウイグル族との接触は少なくなり、ウイグル語を使うチャンスもあまりなく、ウイグル語を忘れ

かけていると言いながらも、筆者たちのウイグル語による質問にはきちんとウイグル語で答えていた。また、「現在でもアクスで出会った友人とは頻りに連絡を取っており、離れてから10年以上たっても、民族の違いを超えた絆でつながっている。子どもがウルムチの大学で勉強している友人は、子どもに会いに来るたびにうちに遊びに来る。私も年に一度はアクスに遊びに行っているよ」と、友好的な民族間関係を保つためには互いの言語を勉強し、理解を深める必要があると強調していた。

表1からもわかるように、中華人民共和国の成立時では、漢族人口は総人口の6.7%に過ぎなかったが、1960年代半ば頃から顕著に増加している。当時、新疆に移住してきた漢族間ではウイグル語を積極的に勉強した人が多く、そのほとんどは生活や仕事の必要性から覚えたという。現在は、ウイグル族の人口は新疆全体で5割を切っており、漢族人口は4割にまで増加している。ウイグル社会におけるこうした人口学的変化は、社会的言語環境においても様々な変化をもたらし、ウイグル族の人々は漢語ができないと日常生活でも不自由を感じるようになり、逆に漢族の人々はウイグル語を覚える必要がないと感じるようになってきたのである。(アナトラ、河野)

おわりに——展望と課題

以上、本稿ではソ連が存在した20世紀の言語教育政策に着目し、当時、言語教育政策がどう策定・実施され、中国国民はそれをどう受容していたのか、さらに当時の言語教育政策は具体的に現在の言語教育政策にどのようなインパクトを与えているのかについて、新疆ウイグル自治区をフィールドとし、①20世紀における社会主義大国のひとつである中国ではどのような言語教育政策が行われ、一般国民はそれをどのように受容していたのか、②当時の言語教育政策は、現在の中国新疆ウイグルの言語教育政策にどのようなインパクトを与えているのか、それは現在の子どもの学力や言語・文化的価値観にどう影響しているのかの2点を中心に、ライフ

ヒストリーの手法を用い、考察を行った。

その結果、1) 1950年代におけるウイグル語の公用語としての役割の大きさ、2) 少数民族言語政策の実施状況と現実の使用状況の合致、3) お互いの言語を認め合うという民族間関係における柔軟さ（当時は、中国国内におけるマジョリティである漢族の間でも、「互いの言語を勉強し、理解を深める」という認識が存在した）、4) 自身の民族語による教育の重要性の指摘（当時の民族教育の質は比較的低いという指摘もあったが、馴染みのある母語で教育ができる点で知識の伝承が十分にできたという民族語による教育の重要性も同時に述べられていた）、5) 国際関係が言語政策に及ぼす影響の大きさという5つの特徴が見られることが明らかになった。

これら5点をまとめると、今回聞き取り調査を実施した人々が生きた1950年代では、現在ほど漢語教育への偏重が認められず、ウイグル語やロシア語など各家庭それぞれが自由にどの言語の学校で学ぶかを選択し、なおかつ自身の母語以外の言語での民族間交流もなされていたということがいえる。

1950年代の人々の言語観や言語選択には、現在の漢語偏重の背景に見られるような、大学進学やよい就職先に進み、よりよい人生を手に入れようとする「向上心」に類似する傾向（例えば、より教育の質が高いロシア語学校への進学など）も見受けられるが、現在と大きく異なる点は当時の言語政策が中国を取り巻く国際関係により大きく左右されていた点であるといえ、それは中ソ対立が表面化した1960年代におけるロシア語学校の閉鎖やロシア人教員の母国への引き上げ、中国政府によるソ連各国への留学生派遣の中止に顕著であった。

本稿では、20世紀社会主義大国のひとつとして、中国、特に新疆ウイグル自治区の事例を取り上げたが、忘れてはならない旧社会主義の大国としてソ連（旧ソ連圏）がある。今後は、新

疆ウイグル自治区で明らかになった点を踏まえ、旧ソ連圏、特に中央アジア⁽²²⁾での調査を実施し、中国とソ連の言語教育政策がいかなるものであったのか、それが現在の言語教育や子どもたちの学力にどのような影響を与えているのかなどについて、比較、考察を行うことが課題である。（河野、アナトラ）

(22) 本研究プロジェクトにおいては、旧ソ連を構成した15の構成共和国のうちでも、中央アジアの1国であるウズベキスタンを取り上げる。かつてウズベキスタンでは、現在の新疆ウイグル自治区と同様に民族間の交流語としてのロシア語教育が強く推進され、民族語であるウズベク語は軽視される傾向にあったが、1991年のソ連崩壊に伴う独立後は、国家語としてのウズベク語が重視されるようになっている。